

日蓮大聖人御書全集

しゅししんごしよ

主師親御書

新版
319
〜
325

主師親御書

けんちよう

ねん

建長7年('55)

34歳

さい

しやかぶつ

われ

しゆ

し

おや

いちにん

釈迦仏は、我らがためには、主なり、師なり、親なり。一人

救

まも

と

たま

あみだぶつ

われ

してすくい護ると説き給えり。阿弥陀仏は、我らがために

しゆ

おや

し

てんだいだいし

は、主ならず、親ならず、師ならず。しかれば、天台大師こ

しやく

い

さいほう

ほとけべつ

えんこと

ほとけべつ

れを釈して曰わく「西方は仏別にして縁異なり。仏別な

ゆえ

おんけん

ぎじよう

えんこと

ゆえ

しふ

ごじよう

るが故に隠頭の義成ぜず、縁異なるが故に子父の義成ぜ

きよう

しゆまつ

まった

むねな

まなこ

と

ず。またこの経の首末に全くこの旨無し。眼を閉じて

せんさく

穿鑿せよ」と。

まこと

しゃかぶつ

ちゅうてんじく

じょうぼんだいおう

たいし

実なるかな、釈迦仏は中天竺の浄飯大王の太子として、

じゅうく

おんとし

いえ

い

たま

だんどくせん

もう

やま

こ

たま

十九の御年、家を出で給いて、檀特山と申す山に籠もらせ給

たかね

のぼ

つまぎ

しんこく

くだ

みず

むす

い、高峰に登っては妻木をとり、深谷に下つては水を結び、

なんぎようくぎよう

おんとしさんじゅう

もう

ほとけ

成

たま

難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給いて

いちだいししようぎよう

と

たま

うわ

けごん

あごん

ほうどう

ほんにや

一代聖教を説き給いしに、上べには華嚴・阿含・方等・般若

とう

しゅじゆ

きようぎよう

と

たま

ないしん

ほけきよう

と

等の種々の経々を説かせ給えども、内心には法華経を説

思

しゅじよう

きこん

かばやとおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにし

いっしゆ

ほとけ

みこころ

と

たま

ひと

こころ

て一種ならざるあいだ、仏の御心をば説き給わで、人の心

したが

よろず

きよう

と

たま

に随い万の経を説き給えり。

しじゆうにねん

こころぐる

おぼ

かくのごとく、四十二年がほどは心苦しく思しめししか

いま ほげきよう いた

わ がん すで まんぞく

わ

ども、今、法華経に至つて、「我が願、既に満足しぬ。我が

しゅじよう ほとけ

と たま

くおん

このかた

ごとくに衆生を仏になさん」と説き給えり。久遠より已来、

しか

くま

とき きじん

あるいは鹿となり、あるいは熊となり、ある時は鬼神のた

く たま

くどく

ほげきよう

しん

めに食われ給えり。かくのごとき功德をば、法華経を信じ

しゅじよう

しん ぶっし

じつ

わ

たらん衆生は、「これ真の仏子なり」とて、「これ実の我が

こ

くどく

ひと あた

と たま

子なり。この功德をこの人に与えん」と説き給えり。これ

おぼ

おや しゃかぶつ

蔑

おも

ほどに思しめしたる親の釈迦仏をばないがしるに思いなし

いちだいじ

と

たま

ほげきよう

しん

て、「ただ一大事をもつて」と説き給える法華経を信ぜざら

ひと

ほとけ

成

よ

よ

こころ

ん人は、いかでか仏になるべきや。能く能く心を

とど

あん

留めて案ずべし。

に

まき

い

ひとしん

きよう

きぼう

二の巻に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、

すなわ

いっさいせけん

ぶつしゆ

だん

ないしよきよう

いちげ

う

則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至余経の一偈をも受けざ

もん

こころ

ほとけ

ほけきよう

じゆ

れ」と。文の心は、仏にならんためには、ただ法華経を受

じ

ねが

よきよう

いちげいっく

う

さん

持せんことを願つて、余経の一偈一句をも受けざれと。三の

まき

い

う

くに

きた

だいおう

ぜん

巻に云わく「飢えたる国より来つて、たちまちに大王の膳に

あ

もん

こころ

う

くに

きた

遇うがごとし」と。文の心は、飢えたる国より来つて、た

だいおう

ぜん

遭

こころ

いぬ

やかん

こころ

いた

ちまちに大王の膳にあえり。心は、「犬・野干の心を致す

かしよう もくれんとう しようじよう こころ

とも、迦葉・目連等の小乗の心をば起こさざれ。破れた

いし あ か き はな 咲 へん 成

る石は合うとも、枯れ木に花はさくとも、一乗は仏になる

おお しゅぼだい ぼうぜん て いっぱつ

べからず」と仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢

投 かしよう たいきゆう こえだいせんかい ひび もう なげ かな

をなげ、迦葉は涕泣の声大千界を響かすと申して歎き悲し

いま ほけきよう いた かしようそんじや こうみようによらい きべつ

みしが、今、法華経に至つて、迦葉尊者は光明如来の記別

さず もくれん しゅぼだい まかかせんねんとう み

を授かりしかば、目連・須菩提・摩訶迦旃延等はこれを見て、

われ さだ ほとけ う くに きた

「我らも定めて仏になるべし。飢えたる国より来つて、た

だいおう ぜん 遭 よろこ もん

ちまちに大王の膳にあえるがごとし」と喜びし文なり。

われ しゅじよう むしこうごう このかた みようほうれんげきよう によいほうしゅ

我ら衆生、無始曠劫より已来、妙法蓮華経の如意宝珠を

かたとき あいはな

むみよう さけ

誑

ころも うら

片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて、衣の裏

掛 知

すく え た

おも

にかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思ひぬ。

なんみようほうれんげきよう

とな たてまつ

すみ

ほとけ

南無妙法蓮華経とだに唱え奉りたらましかば速やかに仏

な しゅじよう

ごかいじゅうぜんとう

かい

に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわずかなる戒を

てん う

だいぼんてん

たいしやく

み

な

もつて、あるいは天に生まれて大梵天・帝釈の身と成つて

おも

とき ひと う

もろもろ

こくおう

いみじきことと思ひ、ある時は人に生まれて諸の国王・

だいじん

くぎよう

てんじようびとう

み な

ほど

樂

大臣・公卿・殿上人等の身と成つて、これ程のたのしみな

おも

すく

え た

おも

よろこ

しと思ひ、少なきを得て足りぬと思ひ、悦びあえり。これ

ほとけ

ゆめ

なか

樂

幻

樂

を仏は、「夢の中のさかえ、まぼろしのたのしみなり。ただ

ほけきよう たも たてまつ すみ ほとけ 成 と たま
法華経を持ち奉り、速やかに仏になるべし」と説き給えり。

また、四の巻に云わく「しかもこの経は、如来の現に在

すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」云々。

釈迦仏は、師子頰王の孫、浄飯王には嫡子なり。十善の

位をすて、五天竺第一なりし美女・耶輸多羅女をふりすて

て、十九の御年出家して勤め行い給いしかば、三十の御年

成道し御坐しまして、三十二相八十種好の御形にて、御幸

なる時は、大梵天王・帝釈左右に立ち、多聞・持国等の

してんのうせんごいによ

ほう

と

たも

おんとき

しべんはつとん

せつぼう

四天王先後圍繞せり。法を説き給う御時は、四弁八音の説法

ぎおんしようじや

み

さんちごげん

とく

しかい

敷

は祇園精舎に満ち、三智五眼の徳は四海にしけり。しかれ

ひと

ほとけ

にく

おんしつ

ば、いずれの人か仏を悪むべき。なれども、なお怨嫉する

おお

めつど

のち

いちごう

ぼんのう

だん

すこ

つみ

もの多し。まして滅度の後、一毫の煩惱をも断ぜず少しの罪

わきま

ほけきよう

ぎようじや

にく

そね

ものおお

をも弁えざらん法華経の行者を悪み嫉む者多からんこと

うんか

み

すなわ

まつだい

は、雲霞のごとくならん見えたり。しからば則ち、末代

あくせ

きよう

と

ひと

かたきおお

と

悪世にこの経をありのままに説く人には敵多からんと説

そうろう

せけん

ひとびと

われ

たも

われ

よ

たてまつ

かれて候に、世間の人々、我も持ちたり我も読み奉り

ぎよう

そうろう

かたき

ほとけ

そらごと

ほけきよう

まこと

行じ候に、敵なきは、仏の虚言か、法華経の実なら

まこと おんきよう

とうせい ひとびと

きよう

ざるか。また実の御経ならば、当世の人々、経をよみま

そうろう そら 読

まこと ぎようじや

いらせ候は虚よみか、実の行者にてはなきか、いかん。

よ よ こころう

あき

能く能く心得べきことなり。明らむべきものなり。

し まき

たほうによらい

しやかむにぶつおんとしさんじゆう

ほとけ

四の巻に、多宝如来は、釈迦牟尼仏御年三十にして仏に

な たも

はじ

けこんぎよう

もう

きよう

じつぼう け おう

砌

成り給うに、初めには華嚴経と申す経を実報華王のみぎり

べつえんとんだい

ほうりん

ほうえ

くどくりん

こんごうどう

こんごうぞう

にして、別円頓大の法輪、法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵の

しぼさつ

たい

さんしちにち

あいだと

たま

きた

たま

四菩薩に対して三七日の間説き給いしにも来り給わず。そ

にじよう

き こんかな

ようらくさいなん

ころも

の二乗の機根叶わざりしかば、瓔珞細軟の衣をぬぎすて、

そへいくに

ころも

き

はらなこくろくやおん

おもむ

じゆうにねん

麤弊垢膩の衣を着、波羅奈国鹿野苑に趣いて、十二年の

あいだしようめつしたい ほうもん と たま

あにやくりんとう ごにん

間 生滅四諦の法門を説き給いしに、阿若俱隣等の五人

しようか はちまん しょてん むしようにん え

つぎ よく しきにかい

証果し、八万の諸天は無生忍を得たり。次に欲・色二界の

ちゆうげん だいほうぼう ぎしき じようみよう おんしつ さんまんにせん ところ た

中間、大宝坊の儀式、浄名の御室には三万二千の牀を立

はんによ びやくろち ほとり じゆうろくえ ぎしき じんじようこゆう むね 宣

て、般若・白鷺池の辺、十六会の儀式、尽浄虚融の旨をの

たま きた たま ほけきよう いち まきないしし まき

べ給いしにも来り給わず。法華経にも、一の卷乃至四の卷の

にんきほん きた たま ほうとうほん いた はじ きた たま

人記品までも来り給わず、宝塔品に至つて初めて来り給え

り。

しゃかぶつ さきしじゆうよねん きよう われ そらごと おお

釈迦仏、先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば、

ひともち ほけきよう しんじつ と たま

人用いることなく、法華経を真実なりと説かせ給えども、

ほとけ

むこもろ

ひと

なが

そらごと

たま

き

「仏ほとけというは無虚妄むこもろの人とて永く虚言むとし給わずと聞きき

いちにち

ににち

ひとつき

ふたつき

いちねん

に、一日ならず二日ならず、一月ならず二月ならず、一年

にねん

しじゅうよねん

ほど

そらごと

おお

二年ならず、四十余年の程まで虚言そらごとしたりと仰せられしか

きよう

まこと

と

たも

そらごと

ば、またこの経きようを実まことと説き給うも、虚言そらごとにやあらんずら

ふしん

ふしん

しゃかぶついちにん

ん」と不審ふしんをなししかば、この不審ふしん、釈迦しゃかぶつ一人いちにんしては、

しゃりほつ

はじ

こと晴

たほうぶつ

ほうじようせかい

舍利弗しゃりほつを始め、事はれがたかりしに、この多宝たほうぶつ仏ぶつ、宝浄ほうじよう世界せかい

きた

たま

ほけきよう

みな

しんじつ

よりはるばると来らせ給きたいて、「法華ほけきよう経きようは、皆みなこれ真実しんじつなり」

しようみよう

たま

さき

しじゅうよねん

きよう

そらごと

おお

と証明しようみようし給たまいしに、先の四十余年の経きようを虚言そらごとと仰せらる

まこと

そらごと

さだ

ること、実まことの虚言そらごとに定まるさだなり。

ほけきよう ほか いつさいきよう そら う もんもんくく

また、法華経より外の一切経を空に浮かべて、文々句々、

あなんそんじや さと ふる な べんぜつ と

阿難尊者のごとく覺り、富楼那の弁舌のごとくに説くとも、

なんじ しゆみせん もう やま じゆうろくまんはつせん

それを難事とせず。また、須弥山と申す山は、十六万八千

ゆじゆん こんぜん そうろう たほうせかい 礫 投 もの

由旬の金山にて候を、他方世界へつぶてになぐる者あり

なんじ そうら ほとけめつど のち とうせい まつだいあくせ

とも、難事には候わじ。仏滅度して後、当世・末代悪世に

ほけきよう よ と かつ

法華経をありのままに能く説かん、これを難しとすと説かせ

たま ごてんじくだいいち だいいりき だいはだつた たけさんじようごしやく

給えり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も、長三丈五尺、

ひろ いちじようにしやく いし ほとけ 投 掛 そうら

広さ一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候いしか。また

かんどだいいち だいいりき そ こうう もう hito くこくい かま みず

漢土第一の大力、楚の項羽と申せし人も、九石入りの釜に水

み そうら

提 そうら

満ち候いしをこそひさげ候いしか。それにこれは、

しゆみせん

投 もの あ

きよう せつ

「須弥山をばなぐる者は有りとも、この経を説のごとく読

たてまつ

ひと あ

と

そうらう

ひと

み奉らん人は有りがたし」と説かれて候に、人ごとに

きよう

読

か

と

そうらう

きようもん

そらごと

な

とうせい

この経をよみ書き説き候。经文を虚言に成して、当世の

ひとびと

みなほけきよう

きようじや

おも

よ

よ

おんこころえ

人々を皆法華経の行者と思ふべきか。能く能く御心得あ

るべきことなり。

ご まき

だいはほん

い

ぜんなんし

ぜんによにんあ

みよう

五の巻の提婆品に云わく「もし善男子・善女人有つて、妙

ほけきよう

だいはだつたほん

き

じようしん

しんぎよう

ぎわく

法華経の提婆達多品を聞いて、浄心に信敬して、疑惑を

しよう

じごく

がき

ちくしよう

お

じつぼう

ぶつぜん

生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前

しょう
に生ぜん」と。この品には二つの大事あり。

いち

だいただつた

もう

あなんそんじゃ

あに

こくぼんおう

一には、提婆達多と申すは、阿難尊者には兄、斛飯王に

ちやくし

し しきようおう

まご

ほとけ

従兄弟

ほとけ

は嫡子、師子頰王には孫、仏にはいとこにてありしが、仏

いちえんぶだいいいち

どうしんじゃ

あだ

は一閻浮提第一の道心者にてましまししに、怨をなして、

われ

えんぶだいいいち

じゃけん

ほういつ

もの

ちか

「我はまた閻浮提第一の邪見・放逸の者とならん」と誓つ

よろず

あくにん

かた

ほとけ

あだ

さんぎやくざい

な

て、万の悪人を語らつて仏に怨をなして、二三逆罪を作し

げんしん

だいちわ

むけんたいじよう

お

そうら

てんのう

て、現身に大地破れて無間大城に堕ちて候いしを、天王

によらい

もう

きべつ

さず

ほん

そうろう

ぜんなんし

如来と申す記別を授けらるる品にて候。しかれば、善男子

もう

おとこ

きよう

しん

ちようもん

と申すは、男この経を信じまいらせて聴聞するならば、

だいばだつたほど

あくにん

ほとけ

成

まつだい

ひと

提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人は、た

じゆうざい

たぶん

じゆうあく

過

ふか

たも

とい重罪なりとも、多分は十悪をすぎず。まして深く持ち

たてまつ

ひと

ほとけ

奉る人、仏にならざるべきや。

に

しやがらりゆうおう

りゆうによ

もう

はっさい

二には、娑竭羅竜王のむすめ竜女と申す八歳の

蛇

ほとけ

な

ほん

そうろう

珍

くちなわ、仏に成りたる品にて候。このことめずらしく

たつと

そうろう

ゆえ

けごんぎよう

によにん

じごく

貴きことにて候。その故は、華嚴経には「女人は地獄の

つか

よ

ほとけ

しゆし

た

げめん

ぼさつ

に

ないしん

使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心

やしや

もん

こころ

によにん

じごく

つか

は夜叉のごとし」と。文の心は、女人は地獄の使い、よく

ほとけ

たね

断

げめん

ぼさつ

に

ないしん

やしや

仏の種をたつ、外面は菩薩に似たれども、内心は夜叉のご

としと云えり。また云わく「二度女人を見る者は、よく眼ひとたびによん み もの まなこ

の功德を失う。たとい大蛇をば見るとも、女人を見るべかくどく うしな だいじや み によん み

らず」と云い、またある経には「あらゆる三千界の男子のい きよう さんぜんかい なんし

諸の煩惱を合わせ集めて、一人の女人の業障となす」と。もろもろ ぼんのう あ いちにん によん ごうしよう

三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めてさんぜんだいせんせかい なんし もろもろ ぼんのう と あつ

女人一人の罪とすと云えり。ある経には「三世の諸仏の眼によんいちにん つみ い きよう さんぜ しよぶつ まなこ

は脱けて大地に墮つとも、女人は仏に成るべからず」と説ぬ だいち お によん ほとけ な と

き給えり。しかるに、この品の意は、人・畜をいわば畜生たま ほん こころ にな ちく ちくしよう

たる竜女だにも仏に成れり。まして我らは形のごとくりゆうによ ほとけ な われ かた

にんげん

かほう

かほう

勝

ほとけ

人間の果報なり。彼の果報にはまされり。いかでか仏にな

おぼ

らざるべきやと思しめすべきなり。

なか

さんあくどう

墮

と

そうろう

中にも、「三悪道におちず」と説かれて候。

じごく

もう

はっかん

はちねつ

ないしはちだいじごく

なか

はじ

その地獄と申すは、八寒・八熱、乃至八大地獄の中に、初

あさ

とうかつじごく

たず

いちえんぶだい

したいっせんゆじゆん

め浅き等活地獄を尋ぬれば、この一閻浮提の下一千由旬な

なか

ざいにん

たが

つね

がいしん

り。その中の罪人は、互いに常に害心をいだけり。もした

あいみ

りようし

しか

おのおのくろがね

つめ

またま相見れば、獵師が鹿にあえるがごとし。各々鉄の爪

たが

掴

裂

けつにくみなつ

のこ

ほね

をもつて、互いにつかみさく。血肉皆尽きて、ただ残つて骨

ごくそつ

ぼう

こうべ

足

裏

いた

のみあり。あるいは獄卒、棒をもつて頭よりあなうらに至

るまで皆打ちくたく。身も破れくだけて、なお沙のごとし。
みなう 砕 み やぶ すな

焦熱なんど申すは、譬えんかたなき苦なり。鉄城四方に回
しょうねつ もう たと 方 く てつじょうしほう めぐ

つて門を閉じたれば、力士も開きがたく、猛火高くのぼつ
もん と りきし ひら みようかたか

て金翅のつばさもかけるべからず。
こんじ 翼 翔

餓鬼道と申すは、その住処に二つあり。一には地の下
がきどう もう じゆうしよ ふた いち ち した

五百由旬の閻魔王宮にあり。二には人天の中にもまじわれ
ごひやくゆじゆん えんまおうぐう に にんてん なか

り。その相、種々なり。あるいは腹は大海のごとく、のんど
そう しゆじゆ はら たいかい 喉

は鍼のごとくなれば、明けても暮れても食すともあくべか
はり あ く じき 飽

らず。まして五百生・七百分生など飲食の名をだにもき
ごひやくしやう しちひやくしやう おんじき な 聞

おのれ とうべ 碎 はずき じき

かず。あるいは己が頭をくだきて脳を食するもあり、あ

いちや ごにん こ う よ うち じき

るいは一夜に五人の子を生んで夜の内に食するもあり。

ばんか はやし むす と つるぎ はやし

万菓、林に結び。取らんとすれば、ことごとく劍の林

ばんすい たいかい なが い の みようか

となり。万水、大海に流れ入りぬ。飲まんとすれば、猛火と

く 免

なる。いかにしてか、この苦をまぬかるべき。

つぎ ちくしようどう もう じゆうしよ ふた こんぽん たいかい

次に畜生道と申すは、その住所に二つあり。根本は大海

じゆう しまつ にんてん まじ みじか もの なが もの 呑

に住す。枝末は人天に雑われり。短き物は長き物にのま

ちい もの だい もの く たが あいは

れ、小さき物は大なる物に食らわれ、互いに相食んでしば

休 ちようじゆう う

らくもやすむことなし。あるいは鳥獸と生まれ、あるい

ぎゆうば な おも もの 負

は牛馬と成つても重き物をおおせられ、西へ行かんと思え

ひがし 遣 ひがし い にし

ば東へやられ、東へ行かんとすれば西へやらる。山野に多

みず くさ おも よ し

くある水と草をのみ思つて、余は知るところなし。

ぜんなんし ぜんによにん ほけきよう たも

しかるに、善男子・善女人、この法華經を持ち、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

南無妙法蓮華經と唱え奉らば、この三罪を脱るべしと説

たま なにごと

き給えり。何事か、これにしかん。たのもしきかな、たの

もしきかな。

ご まき い われ だいじよう おし ひら

また、五の卷に云わく「我は大乗の教えを聞いて、苦の

しゆじよう ぞだつ こころ 我 だいじよう おし 闡

衆生を度脱せん」と。心は、「われ大乗の教えをひらい

てもうと申すは、法華經ほけきようを申すもう。「苦くの衆生しゆじよう」とは何ぞやなん。地獄じごく
しゆじよう
の衆生しゆじようにもあらず、餓鬼道がきどうの衆生しゆじようにもあらず、ただ女人にょにんを
さ指して、く「苦くの衆生しゆじよう」と名なづけたり。五障ごしよう・三従さんじゆうと申して、
みつ三つ従したことあがう事いつ有つて、五つさわの障りあり。竜女りゆうによ、「我われ、女人にょにん
みの身うを受けて、女人にょにんの苦くをつみ抓しれり。しかれば、余よをしば知
るべからず、女人にょにんを導みちびかん」と誓ちかえり。南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきよう、
なんみようほうれんげきよう
南無妙法蓮華經。

日蓮にちれん 花押かおう